



第18号：平成27年11月18日 神坂雪佳 —— 1

雪佳の生涯は、東アジアの一小国に過ぎなかった日本が世界の列強と直接に向き合い、自立した近代国家としての存在を示すことに費やした時期と合致する。和服から洋服へ、洋食を和食に馴染ませる時間帯でもあった。彼自身、世紀末の欧州の大地を歩み洋服、洋食を体験したが、遺された写真の多くは和服であり、礼装の洋服には勲章が写しだされていた。将に生活様式の大変革の時期に生き、今日ではデザインとして認める様々な生活用品に日本の美を持ち込む仕事に明け暮れた。しかし日本文化が否定されるのを知らずに昭和十七年一月嵯峨野で歿した。

彼が日本の美を王朝文化に求めた琳派の継承者であったことは本図が示す。散り始めた楓、その木立の陰から公達の視線が向かう先は美しき姫君か、はたまた昔の人の面影だろうか、鑑賞者に強く選択を求める余韻がそこにある。